

「二〇世紀東アジアをめぐる人の移動と社会統合に関する総合的研究」 満洲班

第1回 ワークショップ  
20世紀「満洲研究」の到達点と今後の課題  
～「満洲」の解体と再構築をめざして～

日時 2月22日 日曜日 13時～19時  
会場 上智大学 大阪サテライト 教室2

<http://www.sophia-osaka.jp>

プロジェクト「二〇世紀東アジアをめぐる人の移動と社会統合に関する総合的研究」の満洲班では課題を「満洲」の解体と設定しました。その趣旨は以下のとおりです。

#### 課題設定趣旨

所謂「満洲」にかかわって生じた人、もの、情報などさまざまな移動をとりあげ、その移動が展開する範囲を検討していくことによって、「満洲」と言っているものが、あとから与えられた「満洲」という語でもって表現されていることに気付く。この作業を通じて、我々が「満洲」という言説を改めて読み解きながら、いったん解体していく。

たとえば、満洲族の故地としての *manchuria* があるが、これは他者からみて満洲族の勢力圏をそう呼んだものであって、満洲族は自分たちでそう呼ぶわけではない。自分たちのテリトリー内にはきちんと部分部分に名前をつけて呼んでいる。

満洲研究のなかで満蒙といわれてモンゴルも取り上げられるが、モンゴル人の活動圏は *mongolia* と呼ばれるが、その範囲は現在のモンゴル国を越えてなお広い。

朝鮮族/朝鮮人の活動の範囲で見れば、高句麗や渤海にさかのぼればその活動は鴨緑江の北岸にも及び、中国における東北工程において、分析対象とされている。しかし高句麗や渤海にまでルーツが遡れるとする韓国の歴史観をみれば、朝鮮半島から高句麗・渤海にいたる範囲が朝鮮文化の活動圏といえなくもない。

だいいち、「満洲」自体が、女真族が自分たちをマンジュと呼んだ時からできた名詞なのである。

しかし、我々は安易に「満洲」という語を使って何かを語る。それはなぜだろうか。第一には膨大な「満洲」研究ゆえであろう。中国東北地域史研究というよりも広い視野で問題を設定できるゆえに *Manchurian Studies* としてしまう。そこには中華人民共和国の偽満洲国史も含めて「満洲国」を対象とした研究の膨大な成果も含めてしまっている。

そしてこの「満洲」研究はその複雑さゆえに、欧米圏からも関心をもたれる。複雑なものすべてを覆えるとして「満洲」研究 Manchurian Studies という呼び方が安易に選択されることも多い。

本科研の満洲班の課題の半分である「満洲の解体」は「満洲」研究というカテゴリーに何が含まれるかを明らかにし、そこで取り上げられる対象のなかのいくつかをとりあげて再考し、「満洲」の解体を試みるものである。その際、対象として移動するものを主にとりあげることとする。それによってその対象を扱う問題が「満洲」にとどまらないことを注目することが「満洲」の解体の第一歩と考えるためである。そして、その結果を用い、「満洲」研究の再構築を目指したい。

### 今ワークショップ趣旨

「満洲」の解体をめざすにあたって、これまで満洲を対象としてきた研究者により、現時点での「満洲研究」の到達点を提示し、満洲プロパー非満洲プロパー双方から「満洲研究」の問題を洗い出し、当該地域とかかわる研究の今後の可能性を見出すことを目的とする。

### プログラム

13時~15時

13:00-13:15 趣旨説明

13:15-14:00 報告1 上田貴子 「20世紀満洲研究の概要」

14:00-14:45 報告2 猪股祐介 「満洲移民研究の死角—戦時暴力をめぐる沈黙について」

休憩 14:45-15:00

15:00-15:45 報告3 坂部晶子 「少数民族—移動する人々の生活史」

15:45-16:30 報告4 永井リサ 「環境からみた満洲史」

16:30-17:15 報告5 西澤泰彦 「人とモノ・情報の移動—建築分野を事例として」

休憩 17:15-17:30

17:30-18:50 総合討論

19:00 懇親会